9月8日　ヨハネによる福音書10章1～6

「私たちは羊」

今日の聖書箇所の中心となっているのは、私たち人間を羊であるとたとえたイエス様のたとえ話です。ここでは「イエス様こそが本物のメシアである」ということが示されています。羊飼いはイエス様であり、羊はイエス様のもとに集まる人々であり、この個所を読む私たちのことを指しています。悔い改めという門をくぐり、イエス様の言葉を信じる準備ができた人々が、イエス様に導かれる羊として招かれています。

羊は群れを成す動物で、先頭の羊についていく習性があります。指導者に扇動される群衆も、この羊としての性質を持っています。最初に動き出した一人の後についていってしまう羊たちは、正しい羊飼いに導かれれば無事に牧草の生えた餌場にたどり着くことができ、食事を終えて家に無事に帰ることができるのでしょう。しかし、先頭の羊が自分たちを食い物にしようと考える盗人に従ってしまえば、他の羊もまとめて連れ去られてしまうことになります。羊自体は臆病で慎重な性格なのですが、群れとなることによって完全に先頭の羊を信頼しきってしまう、盲目的な性質があるのです。

その習性が私たち人間にもあるということが、人々を羊としてたとえるイエス様の言葉に示されています。時に私たちは容易に、悪い羊飼いや盗人の先導によって、間違った方向に進んでしまうものです。誰かが堂々と語っていると、その内容そのものではなく堂々とした態度によって「正しいことを言っている」と思ってしまうものです。そうではなく、それが本当に神様の御心にかなっているのか、神様を愛し隣人を愛する正しさにかなっているのか、それを常に問い続ける必要があるのです。

今日の個所の続きでは、イエス様は自分のことを「羊の門」としてたとえ、「イエス様と出会うことが信仰に不可欠である」であることを示します。そして、そのたとえ話は「私はよい羊飼いである」というたとえへとつながっていき、イエス様だけが私たち羊が従うべき飼い主であることを示します。「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」という言葉に示されているように、イエス様は私たち人間のために、十字架にかかってでも人々がイエス様を信じることができるように、神様の言葉を第一に守ることができるようにその命を捧げました。自分にまかされた羊であるすべての人々のために命を懸けた、そのイエス様の姿勢が「良い羊飼い」という言葉には示されているのです。

だからこそ、私たちは羊であることを恥じることも、悔いることも必要ないのだと思います。自分がもつ習性を、どうしても神様の言葉に従い切れない、その場の流れに流されてしまう不完全さを理解しながら、そんな私たちのことを導き招いてくれているイエス様への感謝を忘れることがなければ、私たちはどんな時も神様の元に立ち返ることが出来るのです。

私たちは、最初に御言葉に出会ったときは、洗礼を受けると決意をしたその時は、大きな流れに流される一匹の羊だったのかもしれません。しかし今では、確かに羊たちを導く、「先頭の羊」になることができるほどに、神様の愛を実感することができていると思います。イエス様という良い羊飼いに導かれながら、私たちもまた誰かを御言葉に、教会に招くものとして用いられながら、この歩みを進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 10 章 1～6

- 1:「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。